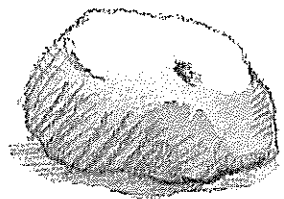


## 天狗のかかと岩



木曜日。勇太にとって、うれしい日だ。なぜって、月・水・金はそろばん、火は習字、土はスイミング…。空いている日は、木曜日と日曜日しかないのだ。

五時間目の終わりのチャイムが、やつと鳴った。勇太の頭の中は、今日はどこへ遊びに行こうかということदैいっぱいで、帰りの会の先生の話なんて全く耳に入っていない。

家に帰るなり、ランドセルをげんかんにほうって外へ出た。けれど、ひまそうにぶらぶらしているやつなんていない。(そうだ。文夫のところへ行ってみよう。あいつは、一週間全部ひまなはずだ。)



文夫の家は、この坂を上がったところのマンションの三階だ。

ピンポン。

文夫は、やっぱりいた。

「何して遊ぶの。」

「このマンションのうらは、どうなっているんだい。」

「がけになっていてあぶないから、母さんから行ってはいけないと言われているんだけどなあ。」

「おもしろそうだな。行ってみようぜ。」

こう言うと、勇太はもうかけ出していた。文夫は勇太の後をしぶしぶ追った。

「ひやあ、高い。矢田川があんな下の方に見えるぞ。」

「やっぱり、帰ろうよ。」

「おい、その木からつるがたれているぞ。」

「ひよつとして、このがけを下りるっていうんじゃないの。」

「決まってるじゃない。さあ、行くぞ。」

そのつるは、二人の体重をささえるには細すぎた。

ブツン。

矢田川へ向かって、二人は落ちていった。



「おい、ここはどこだ。」

「ぼく、もう死んだと思ったよ。」

二人は、ほらあなの中にいた。中はうす暗く、空気がひんやりとしている。周りの様子を見ようとすると、

「ぼうず。何しに来た。」

長くつき出た鼻。赤い顔。手には、やつでの葉のようなうちわ。せなかには、二まいの大きなつばき。はでなちゃんちゃんこを着て、一まいばのげたをはいている男が、後ろに立っている。

「……。」

二人は、声も出ない。



今にもおしっこをもらしそうな二人を見て、少し口元をゆるめながら、男は話を始めた。

「せっかくのお客さんだ。まあ、おれの話でも聞いてくれ。おれはこの白山に住む天狗さまだ。猿投山へ飛び立ったとき、あんまり強くけつたので、おれのかかとのあとが、ほら、がけの上の岩に残っているだろう。」

「うん、聞いたことがある。」

やっと、文夫が口を開いた。天狗はうなずいて、

「むかしはなあ。この辺りの人間は、おれがこの山に住んでいることを知っていて、だれもここには入ってこなんだ。」

「そう言えば、雨のふる夜はこの山が青白く光っていたって、おじいちゃんが話してくれたことがあるよ。」

文夫は、元気になってきた。

「おう、よく知っているなあ。それは、雨のふる夜は寒いもんで、おれが火をたいていたんだ。」

「そんなことをして、火事にならないの。」

「はっはっは。天狗のおれさまが、自分の住みかをもやすわけがない。しかし、青白く光る山を見て、人間たちはおそれたもんだ。おかげで、この山はずっとむかしのまんまだった。」

天狗の声は、少し小さくなった。

「ところが、すぐ下に見えていたじんごろう松が切られてなあ。心配しとったら、この山の上に四角い大きな物ができて…。」

「それ、今ぼくが住んでいるマンションだ。」

「空を飛べるのは、おれさまだけだと思っていたら、うるさい音を立てて、大きなトンぼみたいなのやつが飛んでおるし。あぶなっかしくて、空を飛ぶこともできん。」

「飛行機のことかな…。」

「そしてなあ、ついに、この山をけずり始めたじゃないか。もう人間は、おれさまのことをちつともこわくないらしい。」

「そんなことないさ。ほら、ここに一人、こしをぬかしているよ。」

さつきから勇太は、文夫にもたれかかって、声も出せないでいたのだ。

「母さんたちが心配しているといけなから、がけの上にもどしてやるよ。ちよつと、目をつむってごらん。」



「このマンションのうらは、どうなっているんだい。」

「がけになっていてあぶないから、母さんから行つてはいけないと言われているんだけどなあ。」

「そうか。じゃあ、ここでキャッチボールでもやろうか。」

勇太は、いつになくすなおだった。文夫はボールを投げながら、天狗のことを思い出していた。

天狗の言うとおりにすると、体がういているような感じになり、頭の中が回り始めた。  
そして、気がつくど、二人はマンションの前に立っていた。